

職員異動

三月七日 教授 牧山清 依願本官  
 三月十二日 教授 宮野景一 任松江高等學校教授  
 一教授 堀重里 任松江高等學校教授  
 全日 上田英夫 任第五高等學校教授  
 三月十四日 教授八波則吉 圖書管理ヲ命ズ  
 三月廿二日 教授野々部義應事山口義應  
 右ハ今般前記之通改姓ノ旨届出ツ  
 三月卅一日 囑託講師 緒方正義 百高巖  
 囑託ヲ解ク  
 三月卅一日 岩田久吉、講師ヲ囑託ス  
 四月二日 獨國人、マギスター、アルチウム、ドクトル、メヂチン、フランツ。ヒューボツター、右者大正十年四月一日ヨリ同十三年三月三十一日マデ獨語科教師ニ備入ル  
 四月四日、飯島象太郎、講師ヲ囑託ス  
 教授岡上梁 第一學科主任ヲ命ズ  
 公立中學校教諭陸軍歩兵少尉西川五郎  
 任第五高等學校教授、補生徒監  
 四月十二日 教授伊藤達夫任松山高高等學校教授  
 四月十八日 教授田中義能、任東京帝國大學助教

大正九年度龍南會費決算

收入ノ部		支出ノ部	
通常會員會費	二、七三三、〇〇〇	基本金積立	一一、〇〇〇
新入會員入會金	四四四、〇〇〇	端艇積立金	二五三、〇〇〇
名譽會員會費	五四四、九七〇	豫備金支出	四三三、五〇〇
端艇賣拂代	三〇〇、〇〇〇	師範謝禮	四五〇、〇〇〇
預金利息	九九〇、〇〇〇	選手遠征旅費	三七六、〇〇〇
三十年記念祝賀會ヨリ受入	六二七、三三〇	會計事務取扱費	一、六四〇
前年度繰越	五三二、九八〇	演說部	一、四一八、五五〇
合 計	八、九七一、二九〇	雜誌部	一、〇〇三、八九〇
		劍道部	一、〇〇六、八五〇
		柔道部	一、二九三、〇〇〇
		弓術部	一、五二九、九七〇
		野球部	六三三、七〇〇
		庭球部	二一九、三〇〇
		端艇部	六二二、七五〇
		水泳部	四三三、〇八〇
		山岳部	一、二四、五〇〇
		三十年記念角力士俵修築費及大會費	一、一三、七一一
		三十年記念事業費支出未済次年度へ繰越	一、三四二、〇〇〇
		收入超過及支出殘金次年度へ繰越	二、〇三七、七〇〇
		合 計	八、九七一、二九〇

## 報

## 雜

## 演說部報

時機の見附からなかつたのさ幹事の怠慢さから新入生歓迎演說會延期に延期を重ねて漸つて五月廿三日にそれでも開かれたのは仕合せだつた。龍南一般に演說といふものに對して非常に冷淡になつて來たのは實に遺憾なことである。左に歓迎演說會の模様を書かう。

## 一、開會之辭

内海 委員

## 一、世界と日本

理・一・甲 徳永 郁介君

歐洲大戰の慘虐より説いて國際聯盟やツブ島管理問題に及ぶ、日本の危機を叫んで憂色あり。今一層の精彩な發測な態度を希望する。

## 二、不思議な統一

文・二・乙 賀來 文雄君

宇宙の美はしき統一、嚴かな統一、その下に吾人は宇宙の大法則を見出して吾人の人生觀を定立せよと。

懷疑的に陥つて行く心の影が閃めく。

## 三、玉碎か瓦全か

文・一・甲 藤 陽範君

今や大正の新時代は來りぬ勃々の萌芽は眼前にあり新宗教新思想よ起れ。

眞の玉碎は幾多の試練に堪へて七度八度起きる事なり、所謂自暴の結果を玉

碎といふ意味に非ず、玉碎と瓦全とを超越して吾人はあらゆる苦痛を忍びて吾人の所信を斷行せむ。發測たる態度言辭眞に溜飲三斗の感あり。

## 四、靈魂の覺醒

文・一・甲 小川 久雄君

その主張する所は宗教的自覺にあり。宗教的經歷のある君の演說には矢張りそつした老成的な説教味が見ゆる。

## 五、靈を生かせ

文・三・甲 三城 晁雄君

人間としての眞の自覺を龍南三年の中に得む、吾人の一生の根柢はこの三年の中にあり。

現代社會の腐敗を嘆じて吾人の戒心の要あるを絶叫す。

吾人の靈と萬物の絶對性を一致せしめよ、ここに吾人は不動心の境地に達すべし。熱誠な眞摯な演說である。

## 六、萬物は流る

文・三・甲 小島 眞利君

龍南氣風の頽廢を慨嘆す。時間切迫の爲め本論を省略してしまつたのは残念であつた。

## 七、歡迎之辭

宇佐美部長

演說部の使命を説きて滔々數千言、そ

の深遠なる蘊蓄を傾けて満堂の聽衆をうならせられた。

六 閉會之辭

安倍 委員

二 葉會記事

五月十七日より三日間本館二階豫備教室にて第六回展覽會をひらく出品者左の如し。

三戸 知章

弱き光油(雨後の水車場(油)新市街(油)白

躑躅(油)五月静寂(油)已斐山麓(油)温室の

外油(早春風景(油)静物(油))

岩崎 鐵男

油倉庫(油)シネラリア(油)飯田山附近(水)

早春之丘(水)静物(水)

辛木 貞夫

池(油)

毛里 英於菟

日傾きて(油)静けさ(パステル)

紙 恭輔

山風景(油)

奥村 靖彦

段々畑(油)春光(油)里石原(水)木立(水)

後藤 壽夫

風景(油)

中村 政雄

白川のほざり(水)花園(水)

副島 武之助

風景(水)習作(水)

菅野 寅夫

箕面にて(水)小雨の晴間(水)

早原 剛太郎

蕙ひ(水)

木下 均

風景(水)風景(水)

全部、三十二點内、油十七點水彩、十四點

パステル一點

弓術部報

○本年三月卒業せられし主なる部員は左の如

し小平 潔、母里 太一郎、千野 一布、武田 益

祐、小川 玄益、長尾 周平、末次 逸馬、

其の卒業せらるゝに當り記念として苗木二百本寄附せらる。弓場の西側十五間に植ふ附け、改築せられしまゝの道場一段の落著を與ふるこゝなる。此の苗木の生長はやがて我部の發展を意味するものなるべし

○永年部長として我部のために盡力されし松

本教授は今般都合により其の席を辭せらる

道場の改築といふ大業完成の上、學年のあ

らたまると共に退かれしは眞に終を全うせ

られしものなり。次ぎて部長として最も御

熱心なる今村教授を迎ふるに及び協力一致

して益々發展の歩を進むることなれり。

○四月十七日午後三時、新入部員歡迎會を開

く、さきに三年部員の卒業せらるゝに及び

稍々寂漠を感じし我部が新たに多くの部員

を得たるを喜ぶ。此の日來熊中の先輩小

川玄益氏は懇々參會の上、我等を激勵せら

る、其の御熱心の程感謝に堪へざりき。

以上

水泳部報

大正九年度五高水泳部日誌

前委員 安住 正夫

八月廿日 入會者鶴、森、財津、小方、野口、

横尾君、本當は昨日用意を濟して置かれはな

らぬ筈であるが、最初からそう早く來る人も

あるまいと横着を決めて晝少し前から荷物運

び船貸りに着手する。船には帆をかけたがい

去ふので無理に頼んで帆柱を立てる装置をしてもつたために、肝腎の委員が宿についた時は、もう三時過ぎである。先發の婆さんの言によれば、もう何人が来て、飯も食へぬので唐津に出て行つたこの事。しまつたと思つたが追着かぬ。日が落ちて、そろ／＼暗くなり出した頃からポツ／＼集まり初めた。五人も最初から集まることは中々景氣が好いと喜ぶ松の間を縫つて海岸に出て、おぼろな月明りに舟を漕ぎ出す。沖一面の漁火が明滅する。

極度の静寂があたりをつむ。素的に好い氣持である。一時間あまりで歸つて行燈見たいな古風な置ラムプを中にして車座をつくる。

こほろぎの音が聞ゆる。眞黒々の大男五人が何れも柄に合はぬ詩的冥想にふけて居る時に、眞に突然、メリメリと垣を折し破る音がする。ラムプの蓋がゆら／＼する程の大聲でヤアとどなる。流石の俺も肝をつぶしてふり向くと、猩猩の様な眞赤な顔をした男二人水滸傳中の花和尚と云ふ体で躍り込む。變てこな挨拶が濟むと早速きめつけられた。君が安住君ですか。どうも憤慨に堪へずなあ。晝過ぎに空腹を抱かへてやつて来たです。誰も居らへず。憤慨したですなあ。夫からこの財津

を唐津に出かけてビール一ダブ平げて来たです。松原の長さはホシニ無限ですなあ。歩いても歩いても盡きんです。其中に軌道が来たです。飛び乗つた所が片手にビールを持つてラツパ飲みしつたもんだから、したたか口を打つたです。齒がかける程だつたです。夫から盛にあげたです。君が安住君ですなあいや痛快ですなあ。こむやみに憤慨したり、痛快かつたりする。暫く拜聴した後、いざ大

殿こもりと二階と下とに分れる。暫くすると「委員殿蚊帳に蚊かいてさう居るであります。さうかして呉れんと寝られんであります。」と又々憤慨ぶりを發揮する。因に云ふ此花和尚の名は小方君と云ふ。二部の名物男今年度の水泳部委員である。

廿一日 入會者、井上氏(大學)山下氏(大學)鷺山、幸丸君起き出で見る波の音もせぬ。松原の櫓をこめて薄くかすみ渡つて居る昨夜の酔も醒めたと見えて流石の小方君浦眺かしさう。飯食ふ時もしたらしく下打向て御坐る。「昨晚はさ冷かしく出さ頭を振つて恐れ入る。三國史に出さうな男ながら案外正直である。帆をかけて、且泳ぎ、且上つて高島まで行き、兼て持參の名物松原おこしを嚼る晝

すぎ池田先生と瀬口君到着。夕方昨年の水泳部委員山下君入會。夜山下君の講話を承る。饜の話が出る。山下君の説によれば、所は失念したが深碧の海に切り立つ様に峙て居る花岡岩の絶壁があつて、夕日に反射する光に二十數尋の海底の砂の一粒迄で見ゆる所が有るさうで、其所には鮑が随分居るさうだが、鱗が居るので採取中々危険ださうである。が、命知らずの漁夫共は饜の居ぬ間を見澄まして飛び込むのださうだが、時々饜の餌食さ爲るのださうで、傷口から流れ出る血を帶の様に而きながら消れて終ふ有機が、水面から明かに見得らるゝさうである。蝸も随分危険なものださうで、是に命を落す者の數も中々のもであるが、更に標猛なのは鳥賊で、玄海を一

寸出ると二間半位のはざらに住んでると云ふ。俺達の恐怖心をば極度にあふり立てる。舌を振つて驚歎して居る最中に、澄した顔つきで煙草の輪を吹きながら、今のは丸でうそだよと云ふ。小方君憤慨する事例の如し。是より山下君に渾名して二間半と云ふ。

廿二日 入會者小山君。風が烈しくて波が荒い。今日は移轉すべき日である。松原生清の紀念に池田先生に寫眞を撮つて頂く。一秋

は松原の中で。小方君は、松の木の上に乗つた財津君の足にブラ下り、賄婆さんは鍋を持つち、宿の婆さんは魚を下げて。一枚は海岸の白砂の上に寝そべつて。日が黄昏れてから荷車に荷物を満載し、桃太郎の鬼島征伐よろしく部旗おし立て、ぞろ／＼まれり出す。大浜で船は廻されない。中學校の寄宿舎に着けば電氣もない。瀬口君と飛び出して電燈を交渉し米を注文し大變な騒ぎである。一通り片着いてから、黍園子好しく下げて來た松原おこしを開く。二三人端書出しに行く人がある。

全部其あさから續いておし出した。熊本の水谷格の西洋料理屋に自由亭と云ふのがある。こゝに上り込んで例に由つて例の如き五高式大騒ぎを初めた。中々面白い珍談もあるが肝腎の筆者夫自身が平素たしなまぬ酒故に、ゆでたこの様に酔つて了つたため全部失念した會計もこんなに酔つては出來る事で無い。今日を期として以後全部瀬口君に委任。此日入會者一名もなし。

廿三日 昨日の自由亭のたゞりで餘程疲勞して居る。おまけに、昨日波のために廻せなかつたため、船も無い。水泳は一時中止にして一日丸太の様にころ／＼と横ばる。一方山

下君瀬口君以下は渡しを渡つて船取りにさ出かけたが、二時間歷つても三時間歷つても歸つて來ない。池田先生はこの波の事故と心配されて、双眼鏡持つて、わざ／＼公園に登つて行かれた所が、呑氣者の一行は、ラムネに酔つて大平樂、船なんか俺達の知つた事か何体だつたさうである。夕方になれば空一面は氣味の悪い黄色に彩られる。雲の往來矢の様に速い。大暴しの前兆か、薄氣味悪い夕焼である。

廿四日 思つた通りの大暴れである。松かさの窓カラスに當たる音。松の枯枝の折れる音。波の音。風のうなり。薄暮に近いほくらまで物凄い程である。終日この有様で暴れ通し夜に入つても止む氣合もない。今日は豫定の發會式の日で、昨日、先輩や世話になつた有志に案内のハガキを出し、こゝに唐津警察署長には、特に丁寧にして、將來ストーマの折の懷柔策おさ／＼怠りなかつたが、八時になつても、<sup>秋</sup>の天氣一人の來賓もない。止むを得淋しく會が初めたが、ラムネと松露饅頭と桃とでは氣勢のあがらぬ事おびたゞしく、通夜でもする様である。これではならぬと、瀧なす大雨の中を、賄婆さんに甘酒一升

と蒲鋒を買つて來てもらふ。丁度寄宿舎の一部に陣取つて、野口君をコーチに、練習してる。中學校のテニス選手が加はつた。へお拔け五高ダンスを終りに會を閉ち夫から便所の下駄をはき、メカホン、バケツ、鐘をもつて、天地を籠むる大暴しの大コーラスに和して、相手なしのストームを荒れまはり、僅かに溜飲を下げる。

廿五日 入會者沖君昨日の事を思ふと拍子抜けのする位の好天氣。庭一面にうす高く散り敷く松の枯葉、枯枝、薙ぎ倒されたポプラの樹が僅かに名残を示すのみである。屋外の眩しいばかりの朝日に眼をパチパチさせて居る中學校の小使さんが、電話だとして虹松原に残して置いた小船が木葉微塵だと通じて呉れた。破て了つたなら急ぐ必要もないと又も一睡りして起き出してから、水泳練習表を先生に作つて頂く。寄宿舎に居たつてさうせ練習は出來ないしと、午后になつて同勢こぞつて船見分に行く。ひどい荒れ様ではあつたが、さても甚しい破れ方である。船側はガクガクになつて居る。船底はほんの一部分を残して切りはがした様に跡方もない。側に咲いて居る黄色の月見草を背景にして見れば、屍累々

たる戦の跡と云ふ氣もするが、餘りに悲酸の度を過ぎて、見てる間に得休の知れぬ可笑しが腹の底からこみ上げて来る。見て居ても破れ目が閉がる譯もなしとサツサと引上げる考へて見れば、さてもすさまじきは海の威力である。渚から五六間殆んど月見草の咲いて居る邊までエツサエツサと引き上げて置いたのに此の有様である。いつその事も少し上まで引き上げて置いたらその愚痴も湧く。でも船を廻しに瀬口君なんか出かけた時に、持主の渡しの婆がこの風にはさてもと、止めたと云ふちや無いかと言譯も出来て来る。歸途游泳禁止區域との境界線のあたりで海に飛び込んだ。昨日迄の大暴れで普通は六七間の海底にも、自分の泳ぐ影が映る位に澄んでる海の水が、五月雨頃の白川の水位に濁つて居る風はさうに止んで居ながら、小山の様な大浪が、白い泡を吹いて崩れ懸るのに、扱手で思ふ存分にあはれ廻るのは云ひ知れぬ愉快である。此日仲修造君が乗込んだ。髪を月給取り様の様に分けて、バスケツトを提げた所は堂々たる大學生振りである。先輩に異ひない顔る丁寧な禮をしたのであつたが、實は未だ五高生だと分つて苦笑する。

廿六日——廿九日　どんな事があつたか、すつかり失念。入會者は齋藤、荒木、嘉村、泉、諸富、小川、吉岡、塘林、龍野の諸君。

卅日　入會者石橋君。頭が痛む位に照る好天氣である。鏡山登りが提議される。この暑さに思はず遮面を作る。俺は水泳部の委員だから山登りはと屁理窟をつけて、瀬口君に行つてもらふ。我ながら横着が少々過ぎた様だ。夫で山上でそんな事があつたかは知らぬ。山上でほんの一寸の間留つた丈で、松原のおこしも食はずに大急行とこぼして居た丈を書いて置く。此の日からピンポンなしに中學生が三人、毎日毎日来る様になつた。頗る美少年である。今迄は振り向きもしなかつた。○君一君は、泳ぎにも行かずにピンポンを勉強し初める。今夜は十五夜の名月で。薄暗くなるさすぐに飯と酒と蒲鋒と、井上氏の出發の際停車場に置き忘れて、痛快にも我が物となつた松浦濱とを船に運び込む。博多の大學生山下精二君が酒を寄付する。背を向けて月には知らぬ顔で町田川を溯りつゝ、メガホレをたゞき鐘をならし、最後には洗面用のバケツの底まで叩ききはがし、川沿の旗亭から新に補充したビールに一層メートルを上げて

狭い船の中を川に落ちる覺悟で躍り廻る。酔つて騒ぐと云ふ事程面白い事はあるまい。橋一面に集つた墨山の様な衆人を尻目にかけて後で聲が出ぬ程デカンシヨななる時には、實際痛快である。上陸は夜更けの十二時。これから我等に中學校寄宿舎を借してもらひ、五高に頗る好意を持つて頂いた、五高出身の生田校長の邸をストームする。勿論御禮ストームの意味である。酒は飲んだ。思ふ丈暴れ廻つた。喉が渴く事おびたしい。ミルクセーキが無暗に欲しくなる。そこで未だ野次氣分が失せ切らぬ俺達はピアボールに躍り込んで無暗に冷いものをつぎ込んだ。且躍り百となり、意漸く滿つるに及んで歸つてれる。

卅一日　今までの水泳部はあまりにズボラに過ぎた。余日も無い。そこで今日から改革をやつて朝七時に起きて折から満潮の松浦川に飛び込む。悠々と流るゝ川ながら廻るとなれば中々の事でない。陸に上げれば足がひよるつく程の空腹である。今日こそは、熊本の下宿で、貧弱な魚で無暗に鍊へ上げられた五高生の、魚の概念を、根本的に叩き直す必要があると云ふので、未だピチピチしてる鯛の大きいのを二尾買ひ込んだ。料理は鯛の茶漬で

ある。所が悪い哉大宰の滋味を味つた事なき者は其味ひ方を知らぬ。さし身と心得て片端から食つてしまつた。

一日 十二日間の成績を試みるために、松浦河で師範の試験があり、終つて名に負ふ松浦橋まで溯る。潮は引き潮。流れも相應に早い。やつこの事であつた。午後には、河を泳ぎ渡り、満島の禁止區域境界線迄歩いて行つて、泳ぐ。歸途心附けは、人員が足らぬ。見はないのは小川君である。先に歸つたか。一隊は寄宿舎に歸つて、折から野球試合のあつてる中學校の運動場の隅々から便所の中まで探すが見付からぬ。一隊は船に乗つて海岸近くを漕ぎ回り、海底を眼を皿の様にして探す。沈んで居ても、禰は白いから見ぬさうだなどと考へる。公園の鼻には部旗を持つて、若し歸つて來たらと、信號の符號まで決める。海岸を東へ西へ漕いで分らぬ。信號も無い。いよいよ溺死と決めて終つて、せめて死骸丈でもと云ふので、濱の漁夫をたのんで地びき綱を引いて見やうかと相談して居る所に、死んだ筈の小川君がひよつくりと公園下に現れた。二軒茶屋の邊までぶらついて夫から橋を渡つて歸つた。通夜の事までも

想像して居たのに、稍々拍子抜けの体である。一同を心配さして不都合の到りと懲罰ビール半タイスに衆議一決する。心付けはもう遅い。歸つて見れば時間さ、死体探索の疲れて、夕飯が素的に甘い。

二日 波が荒くて船が出せぬと云ふ事、遠泳は豫定を破られた。せめてもの心遣りに渡場から飛び込んで松浦橋を突き抜けに名に負ふ佐用姫岩まで泳ぎ上る。こゝは二里を距つる鏡山から、佐用姫が夫戀しと殺風景ながら、一躍びに飛び降りた所である。其足跡が今も残つてるから、確かだ。此地方の人は云ふ皆して足跡らしいものを探して見る。在るには在るが、十三文程の大ききで、松樹の幹に針がれを植いた様な、見る眼にも雄壯な小方君の足をばめても、尙餘りある大ききである。でも小方君は俺は遠き昔の上臈の、大狸石の様なおみ足の跡を踏み奉つてるのだと大恐悦である。又其側に佐用姫の蝙蝠傘の趾だと云ふ直徑一寸位の穴もある。小方君之に指を突き込んで、こゝは遠き昔の匂ふばかりの上臈の、傘の趾だぞと恐悦がる。詩人の感涙を催すべき古趾も五高の野蠻人等に會つては半毛の價値もない。が、こゝにかく好い景色

である。岩のみで成つて居る小島に松が所々にゆらつき出て、鮎のすむ松浦河の流を距て、は、五町幅に余る松原の緑と、青い支海の潮が眺められる。今日は殊更波が荒れて外海は一面の潮煙りに、姫島も見ゆる見はずの有様である。午後は三井支店に七釜見物のランチ借りやうと、西唐津迄瀬口君と船に帆をかけて行く。浴衣がけて帽子も被らず袴もせずである。交渉は無事に進捗殊に支店長の物の解つた應接振りが、何時も書生つば扱ひに會つて居る俺達には無性に嬉しい。何だか紳士に成り澄した氣持がして、入る時には何とも思はなかつたはしたが、給仕女の大きな聲に對しても、今更聡しい氣持になる。

三日 風が未だ荒い。波は山の様である。遠泳はおじやん。其他の事も忘れて了つた。

四日 暫くの事で風が一時止んだ。いよいよ五哩遠泳である。波の静かなので、海水の温かなので、高島を廻る頃迄は、一人の脱退者も無いしみつたれの總務閣下が呉れた、ほつちり金で、メタル代を心配する事甚だしい。願くは風が吹いて寒くなつて、一人残らずくたばつて了へど、船漕ぎながら念じて居た所が、好い事には、強い風が海面を掃つて吹き

出した。夫れ見る 好い 工合だと思つてるを、案に異はず成功者は武島、森、塘林、小山、諸富、島のたつた五君である。いゝ氣味である。殊に此日は剛の者の小形君迄、痲痺で船上つたとは益々いゝ氣持である。水に入つたのが前七時半。着陸は武島君のレコードで後一時。兼て三井支店と約束の十二時はどうに過ぎて居る。電話で照會すると船は唐津灣の方へ廻しませうこの事。しばらくするとランチが三井の社旗と日の丸を潮風に翻して、出迎に來る。ラムネと、池田先生の羊羹とを、謝禮兼船長買収費として船に持ち込む。一時間ばかりで船は西に走つて七釜に着く。ランチは岩壁に横付けにして、三時間余りも紀念撮影をしたり、穴の中を探見したり、興を盡す。七釜は玄海に真正面に向いて居る。切り立つ程の岩壁が垂直に海に落ち込む。一尺も離れぬ所から十五尋の深さである。水の青さ。六角柱の壯嚴さ。こゝは又魚が多い。釣針に餌を付けて投込めば、黒い柱の様に魚が群れる。穴は七つ。左の端のは中を泳ぎ通つて向ふに抜けられる。中の水は着く迄澄んで。水の様に冷たい。中には底知れぬ穴もあるが大概は奥まで行ける。孔は右に左に屈曲して居る。中

に入れば屈曲のために外界は半ば陰されて、青白い光が幻の様に差し入る。孔の天井からは不斷に水滴が落ちて居る。幽かながら洩れ聞ゆる浪の音と、水滴が岩床に落ちて立てる音とに耳を傾けて居れば、實際飯たきの婆さんが云つた、穴の中に住んで居ると云ふ、大蛇の傳説が現實の世界に這ひ出て來る。外で鳴らす汽笛の音に急いで出る、更に進んで眼鏡岩と云ふのを見て、左に烏帽子燈臺に厭かぬ眼を巡らしつゝ、西唐津に着いたのは星の瞬く午後八時。

五日 都合により水泳部に失敬して家に歸つて居たので、記事の記すべき事が無い。たゞ此夜一同海岸にストームをやつて、廻つて唐津妙神に五高ダンスの奉納をしたさうである。

六日 何だか無暗に寒い。朝の目覚めには毛布一枚ではふるへる程温度が低い。お買けに浪が無暗に荒く海水の黄色さ。日頃無精な瀬口君が町に出るから夕食のさいを買つて來やうと言ふ。冷たい水、荒れた浪に腹をへらした部員が腹を空かして歸つて來る。五時半になつても六時に爲つても食料品が來ない。婆さんに、至急に蒲鉾を買つてもらひ一寸刻

みに醬油ぶつけて食ふ。八時頃瀬口君酔歩散漫茹蟄の如くに酔つて歸る。腹のひもじさは忘れて、あまりの呑氣さが愉快である。明日は十哩の遠泳。水砂糖と砂糖と、葛湯を買ひに出る。

八日 昨日船の交渉に行つた所が明日はむづかしいと初めは斷はられた程波が高かつた。今日は夫に引きかへ快晴、波も静かである。たゞ水溫が極めて低い。高島を出て其裏をまはり出すと玄海ひた打しの事とて、うれりが無暗に大きい。速度は三哩を四時間。段々浪が荒れ出した。時間を慮つて豫定の濱崎に達せざるに先ち右折して虹松原海岸を西に進む。浪は極度に高くなり、進むのが浪でおし流されるのが分らなくなる。全長八哩たらず時間は六時間半である。紀念撮影。柏旗の歌を終へ、しるこに舌つきを打つ。二部三年の吉村君からの招待により鮎を御馳走になるべく二里の松原をぬけ、澄んだ玉島川を渡つて玉島迄歩く。玉島の鮎と云へば唐津名物の一つである。澄んだ水に生息し、水こけを食つて生きて居ると云ふ動物である。其味の清鮮な事比すべくも無い。初めは鮎狩りを見物さしてもらつた。興に乗つて自分まで網をお



さへ、魚を握る。山川の冷さに震ゆる体を湯にあたため、焼きたての魚を味ふ心地は又こ譬へ難い。木曾節の香譜に興じ、ビールの泡をふき、六時頃辞して歸途に就く。委員のぼんやりでお禮に出る事を忘れた。今こゝに厚く同家の御厚意を謝する次第である。此日唐津中學校に海軍同志會がある。縣下からつめかけた江田島の若者、及び兵學校志望者が、の寄宿舎に集つて居る。歸るが早いか早速ストームをなす。誰かい、音に聞く海軍兵學校のやから、ぬしごんも跳れと叫ぶ者がある。大正九年の世の中にストームなんかを爲る野蠻人では無いと答へる。棒たほしをやり、鐵拳制裁をやる兵學校の生徒から野蠻人と呼ばれて驚いた。大正十年にストームするの時代錯誤であれば、又兵學校がストームを野蠻と呼ぶのも又時代錯誤である様にも思はれる。

八日 最後の日である。發會式の如く、淋しくてはやり切れぬと夕方になつて柏の旗おし立て、海岸で水泳部並に五高の萬歳をこなへ、旗まつ先に中道屋といふ旗亭にくり込む。囊中金が少くない。豆と水爪で、後は酒ばかり呑む。歸る道すがら、生田中學校校長の邸と、吉村君の家と、夫から、三井支店長の宅にお禮

のためにストームをしてまはり、最後に今度のはひつさらへらるゝ恐れがあるので静かに隊を整へて唐津警察署にも御禮にまかり出た。水泳部廿日の生活之で終りを告げた。

尙試験の結果級等左の如し。

一級  
二級  
三級

× × × × × ×

水泳部日誌を誌するに當りて、我は愉快の狀を裝ふ事に努めたり。其結果之は以上の如くおどけ文めいたるものとなれり。暇つぶしに讀過し去るへき讀者にとりては其裏にひそめる苦々しき感情の雲の如く鬱積せるを見る事は或はあらざるべし。されど自分にて其生活を生活し、自分で筆をとりたる我自身において、其一行を讀み直すにも當時の云ひ様なき苦々しさが歷々として行一行に印刻され居るを感ぜざるを得ず。一言にして云は、我が水泳部生活は不愉快の三字に盡く。水泳部委員候補に推さるゝに當りて自己の責に非ざる事務の紛乱がかくまでも發生し來りてかくまでも不愉快の結果を致すべしとは夢想たに

せざりき。從て又參加の卅有余名の我親愛なる五高生諸君にとりて、かくの如き不満足の生活を送らざるを得ざらしむことは些も念頭に上る所に非ざりき。この卅有余名の諸君に對し我は平伏して罪を謝せざるを得ず。此年水泳部の不満足なる結果を致したるは他衆のために一本の麗毛を抜ぐを敢てせざる偏固無精なる我性格が其一半の原因たるを知ればなり。されど同時に我は我が偏固無精なる性格を爆發せしめ、助長せしめ事務の紛乱收拾すべからざるに到らしめ他の一原因に對して心より遺憾せざるを得ず。我性格は確かに偏固にして無情なり。此の性格は到底我を忘れて團體生活に没入するを許さず。いはんや其委員の衝に當るが如きは思へば乱暴極まる行動なりしなり。勿論我は全々自我を捨て去りて團體に没入し去り其機性に甘んずと云ふ人に對して、毫末の敬意を表する能はず。我性格と比較して微塵の我に優るありとは思惟せず。さりながら、かゝる偏せる性格を有する者が、團體生活の委員の職に就かきは實に憤しむべき事なり。參加の諸君に對し、五高垂千の學生に對し、更には、龍南會より贈られたる委員記念の錫製の花瓶に對して、我が

最初辞すべかりし職に便々たりしを謝する辭なきに苦しむ。同時に思ふ、或は私の如き性格を有する人ありて委員の職につく事あらば自己自身にも悔うとも及ばざるの結果を生じ同時に団体全部に對し其職を全する能はざるべし。かゝる事を恐れ敷衍を水泳部日誌の末に附する事の或は徒事に非ざるべきを思ふ。我が偏固極まる性格をして爆發せしめ、順潮に行きつゝある水泳部生活をして混乱蕪雜名狀すべからざるに至らしめし他の一原因に至りては、一言之を述ぶる事能はざるを遺憾さす。想へば水泳部に對して盡せるエチレギの點よりして論すれば、水泳部開設以來私の如き者或は曾て無かりしと斷するをばからず。我は其結果夏期休暇の殘部の全部を費し其期間の焦慮は我腦髓を寸斷せり。新に生氣に溢れて歸り來るべき新學期の劈頭より、我は我健康を氣づかはざるべからざるの結果に到來せり。然も水泳部の事務は少しも進まず數回の揭示によりて督促せる會員の會費不納も其違因を遠く探らば其源或は此處に發せるかと思ふ。されども我は道德上及び其他すべての點よりしてこの原因を責むる事は能はず私に其原因を考慮するにこの原因が發生せ

るも止むを得ざる因果律の結果なるを知る。唯遺憾さすべき點は固なる性格と、破産せる性格と水泳部と、この三者が時を同じし、所を同じして出會し、もつれ合ひ、互に抜け出づべからざる點にからみ合へる事なり。古來歴史を滿し來れる幾十の悲劇も、其源を探らば、其すべてがかくあらざるを得ざる原因の、交錯し紛亂し、斷ちがたき因果の關係をなすによるを見る。我はこの混亂の原因と、參加者に對する責任と、我と我が自に負へりし致命的苦惱の全部とを以て、總て私のみの責任とせずに躊躇せざるなり。

## 山岳部報

暫く部報が溜つたので昨年の事から簡單に誌さう。

年を逐うて堅實な歩みを續けて來た我部は昨年の暑中休暇に決行した二大計畫に依つて殆んど動かすことの出来ない基礎を築くに至つた。二つの計畫とは七月中に行つた滿鮮支

旅行と日本南アルプス縦走の事である。此が大正五年、今の山岳部の前身五高山岳會なるもの、創立されて以來の部の歴史に始めて光

彩ある數頁を加へ得た。云は、我部が九州以外に活躍の歩を進め、やうとする先驅とも云ふべき事業であつた。此等の興味ある記録は近々のうちに小冊子に纏めて熱心な人々の中に頒ちたいと思つてゐる。越えて十月十日より三日間に亘つて山岳展覽會を開いて珍奇なる寫眞書籍登山用具等多數を公開した。三十週年記念祭を背景にして居たので可成りの注目を惹き、又實際此等出品は本館階下の三教室を以てして尙不足を告ぐるの多數に上つたのであつた。かくして内容の多かつた一年が漸く終らんとする頃、對七高野球戦で三百の龍南軍が遠く南下する事になつた、此機を利用して南部九州の雄鎮たる櫻島、霧島山開闢等を二班に分つて登攀するの計畫を發表したが、不幸にして再敗の憂目を見、一同意氣沮喪して又收拾の途なく遂に中止の止むなきに至つたことは最も遺憾とするところで、一部の熱心家の期待を裏切つたことを、一に計畫粗漏の罪として茲に深くお詫をする次第である。

かうして我々は希望にみちた新しい年を迎へた。文字通りの南國の春がまたやつて來た。若人の燃ゆる心は起つて、九州全土に亘る山

岳旅行となつてあらはれた。春休みに入るに當つて發表せられた計畫は左の通りである。

【第一班】 霧島山方面

リーダー 磯邊 秀 俊

第一日 熊本―牧園―硫黄谷温泉泊

第二日 大瀨池を経て韓國嶽（海拔一七〇〇米）往復

第三日 高千穂峰（一五七四米）を経て高原に到り鐵路宮崎に着（宿泊）

第四日 宮崎―青島（解散）

【第二班】 温泉嶽方面

リーダー 小池 英 三

第一日 熊本―三角―島原―温泉古湯泊

第二日 古湯―普賢岳（二三五九米）―妙見岳―小瀨（解散）

【第三班】 九重連峰方面

リーダー 井上八郎右工門

第一日 水前寺驛―宮地―久住町泊

第二日 久住町―久住山（一七八八米）―寒ノ地獄―筋湯泊

第三日 筋湯―森町（解散）

【第四班】 市房山及五家荘方面

リーダー 谷崎 義 一

第一日 熊本―人吉―多良木―湯山泊

第二日 湯山―市房山（一七二二米）―下山解

散

（右後五家荘に向ふ）

豫想した程の参加者を得なかつたのは遺憾であつたがこれは出發當時の著しく不良なりし天候と季節の早過ぎたこととの致す所かと思ふ。紀行の詳細は此紙上では割愛しておく。

新學期に入る。新しく龍南に入つて來た人々を迎へその協力に依つて彌が上にも部の發展を期すべく劈頭第一新入生諸君歓迎の意味を以て四月二十一日午後三時より集會所に小會を開く。今春の旅行經驗談を主とし、最後に淺井教授が所感を述べられ聽衆に多大の感動を與へた。

四月二十四日（日曜）金峰山を中心として其附近探勝の豫定なりしが、當日朝に至り雨に沮まれて中止。

五月八日（日曜）阿蘇の最高峰高嶽（海拔一五九二米）登攀の擧を發表。當日は理想的の登山日和で、會するもの七名。宮地に汽車を捨て、火ノ尾峠より直ちに高嶽絶嶺に攀ちて大觀を恣にし、噴火口に下り山上小屋に小憩。牧馬の點綴する千里々嶺の春色を賞し湯谷を経て戸下温泉に休憩同夜終列車で歸る。

五月十五日（日曜）八方ヶ岳登山。一行金山教授外十名。前回に劣らぬ快晴で、阿蘇、九重の連巒、祖母、温泉、金峰の諸峰を指點し、最も愉快なる展望を收め得た。

如上、我部最近の成績は甚だしく不振ならずとするも、吾々は無論この状態を以て満足する者ではない。吾々は信ずる、未だ同一趣味の下に集ふべき人々の隠れて存することを。吾々の間に先頃こんな話しが起つた。

熱心な人が一人でも多く結束してお互ひにその道の研鑽に力め、且つは其等の人々には直接間接に出來得る限りの便宜を計りたい、その爲にはかゝる場合によく必要とされる緊縮方針を採つて同好の人々のケルツペのみによる組織にしては何うか。平らたく云へば、皆

の中から會員（といふと語弊があるが、外に適當の語がないからかういつて置く）を募つては何うか。併し、それ位ならむしろ一般的にもつと宣傳の聲を大にし、同時に我部の十分なる利用の道を開いて兎も角も今暫く様子を見やうといふ事になつたのである。創立以來五年餘にも到る處山岳熱旺盛の今日未だに

宣傳に努力しなければならぬ我部の現状を甚だしく物足らなく思ふ。吾々青春の血に高

鳴る時代を如何に過すべきかは問題とするもそのうちにあつて我々を常に眞面目に活かし純潔に保つてくれる力を我々は算いさすべきではあるまいか。そして大自然はその方の一つではないだらうか。それは吾々を育むで無限の恩恵をたれて呉れる。心情を高尙にしてくれる。山嶽殊に高い山の恩恵を解しない人が少いさは決して考へられない。理想を逐ふ我々の心が、聖々して純な大自然と共鳴するのは當然であつて、生るべき熾烈なる欲求によつて生れて来た山岳部なる機關を利用するのは實に諸君の特典にして又同時に義務ではあるまいか。山は風景の始まりにして終りだ

「ミラスキンは謂つたが、單なる形而下の快樂さか方便さから離れて山に依つて得られるあらゆる神秘の繪にふれていた。きたいのである。自然の威靈に接するといふ一事は吾々に幾多のよき暗示を與へる手だてともなる。他のあらゆる方面で諸君の精神慾を満足せしめることの出来ない人、更に廣く自然の胸に抱かれんことを欲する人、山の愛すべきを知つた人、此等の人々の爲めに我部は扉を開いて待つて居る。甚だ不完全ではあるが、部の備品は御申出でになりさへすれば、隨時御使

用に供する筈である。陸地測量部の二十萬分一ミ五萬分一の地圖は九州の分丈だけは全部取揃へてあるし、磁石、リュックサック、テント利用の最も可である。

### 端艇部報

#### 端艇競漕會記事

五月二日一雨天に阻まれて一日遅れたために出は例年ほどなかつた。曇つて居たが午後少し降つたばかりで選手競漕の頃は幸に上つた。今年に艇を新しく造つたので競漕の前にその進水式を行ふ。午前拾時廿分、装美々しき新艇の霧島に吉岡會長阿蘇に杉山副會長温泉に平塚端艇部長同乗して綠、赤のユニホI Aを着けた文科理科の選手之を漕ぎゆるやかなピッチで回航點を廻つてゴールについた續いて拾一時半から各クラス選手の競漕が始まつた。

#### 回 級

舵整三二軸  
手調番番手  
タイム

1. 文科一、甲三 小瀬村岩田 五分十三秒

2. 文科二、乙 川來村 鶴水 四分五十四秒

3. 文科三、甲二 小濱井宮張 四分四十九秒

4. 理科二、乙 家大深福梶 四分五十七秒

5. 第二選手五分間競漕 青組 永保堀田豊 五分卅六秒

6. 理科三、甲三 永原古龜 四分四十秒

7. 文科二、乙 山本島田 四分三十四秒

8. 第一選手五分間競漕 青組 平古壙下山 四分四十一秒

9. 文科三、甲一 野賀谷村口 四分四十二秒

10. 理科三、甲三 西渡小佐脇 四分四十二秒

11. 文科三、甲二 林村西根岡 四分二十七秒

12. 上無田青年組 四分二十一秒

13. 熊本青年組 四分十八秒

14. 廣木青年組 四分七秒

15. 上江津青年組 四分八秒

16. 職員競漕

舵整三二軸  
手調番番手

- 第一着 松秋岡西藤 五分四十五秒
- 本田本川岡
- 第二着 杉飯岡須池
- 山島上部田

喝采のうち職員競漕が終る。最後の選手競漕は應援船も一勢にごよめき出し盛んに示威運動をなして選手を向へなごして湖上一面緊張した空気が満ちた。昨年優勝した理科選手の優勝旗返還式があつて競漕に移る。

先づ第二選手競漕にて文科第一コースに理科第二コースにつく。文科廻航にて少しく遅れそれより次第に抜かれて遂に二艇身の差にて敗る。

應援船のごよめきいよ／＼度を増し折から天候險惡となり、暗憚たる黒雲湖面を被ひ殺氣がみなぎつた。

いよ／＼最終の運命を決する第一選手競漕にうつる、文科又第一コースによる、轟然たるスタートの銃聲に文科先を制してすむ回航點迄は文科が優勢であつたが少しく遠廻をしたため理科早く位置を換へる。文科力漕せしも及ばず最後のヘビーに思ふやうに、ピツチあがらず一艇身の差にて再び

優勝旗は赤組の理科の手に落ちた、時に六時半。赤方の勝利のごよめきが、湖面の夕霧を縫ふて響き渡つた、文科理科の選手競漕左の如し。

- 第二選手
- 理科 内立橋野 四分十八秒
- 澤田花本野
- 文科 渡片許大野
- 邊山斐串島中
- 第一選手
- 理科 土中佐小宮 四分七秒
- 岐島木方崎
- 文科 古山田藤高
- 川田中本野

### 野 球 部 報

△新設グラウンド創立三十周年紀念事業の一として我野球部が年來の希望たりし固定ネット及び理想的グラウンドを有するに至りしことは我野球部史否大龍南の運動史に一新記元を劃するものと思惟し特筆大書して置けらる。此の壯舉には吉岡校長の大英斷與つて大いに力あり池田教授の熱心なる御助力も決して忘るべからざるものあり。大正拾年三月

中旬起工、四月下旬グラウンド開き大會を開くを得たり。  
四月廿日 紅白試合(五回ゲーム)

軍 池縣井川部井本田井  
紅 栗山筒小上福津有藤

459138729

軍 田橋田内見崎生野村  
白 野石富山古高瓜天宗

657213984

△新入生歡迎及年級優勝試合

四月廿一廿二、廿八日

文科三年一 〇文科一年 十五A對二

〇理科二年一 理科一年 十一A對五

△新任野球部長。部長堀重里教授松江高等學校に榮轉せられし爲藤岡教授新しく野球部長に任ぜらる。

△グラウンド開き野球大會

四月廿日教授對役員

教授 尾島村岡上内田川岡  
松飯今勝宇竹秋西吉

349125879

役員 西山井村海田林本野  
西本垂木内桃林森中

123456789

理科三年一 文科二年 不戦一勝者なる

る

一陸者戦

理科二年一〇文科一年 十一A對一  
理科三年一 文科二年 八A對七  
優勝戦

理科三年一〇文科一年 八對六

文年 中本田田野野島  
勝一 藤津野有洞宗天廣小  
優科 836214579

△五月七日 高工と練習試合を行ひ七對五にて勝。

△長崎高商來る。五月二十二日長崎醫專と對校試合を行はんとする高商軍は熱火の練習に鍛へし腕を携へて九州一圓遠征の途に上り即ち我部もその挑戦を受けたり。四選手を送れる後はいさゝか寂寞の感なきにしもあらず新選手編入後練習の日幾何もあらず刺へ連日の降雨に不完備の状態にて高商軍を新設クラウンドに迎へてこゝに一戦を交ふることとなり。時に五月九日なり我軍先攻

經過 第一回 五高四球と敵矢に無死満塁の好機至りしも入らず△高商凡退 第二回 兩軍無為 第三回 五高菊地古見の安打ありしも點をなさず△高商二死後石川安打し村上の中堅飛球を落して二點を取らる。 第四回 第五回

第六回 第七回 兩軍無為 第八回 五高凡退△高商石川の中堅右翼間を抜く三壘打と村上のバンドさにより三點を得らる 第九回 五高無為結局四A對零にて五高敗る。敗れしこは云へ豫期以上の緊張せる試合を見せしは意を強くするところにして筒井の怪腕常に敵の打撃を封ぜしをみる。因みに高商軍三本の安打は皆第一打者石川のなせし所なること特筆に價す。

高 田橋見川内井田地 打數 二九  
安折 三  
野石古小筒山藤富菊 四死 五  
643518297 四死 五

商 川上生藤藤好田盛倉 打數 二九  
安折 三  
石村松安後三正飯米 三振 一六  
493628751 四死 一

△長崎醫專來る。長崎醫專も同じ目的を以て來熊せり元より我等の歡迎するところ試合は五月十二日午後四時より武夫原にて開始する。

經過 第一回 兩軍無為 第二回 五高凡退△醫專二死後安中二壘線上に安打し續く村上の中堅飛球野守の失に安中急遽本壘に陥る 第三回 兩軍無為 第四回 五高一死後古見死球に出て筒井左翼中堅間に安打し小川投飛

に二死となり山内中堅前に安打し満塁となり虎視本壘を窺へども富田の投飛に止む△醫專凡退 第一回 第二回 兩軍無為 第七回 五高無為△醫專田川左翼前に安打し林一壘側にバンドして共に生きホークに進壘し神徳又一壘にバンドせしも田川本壘に憤死し林もスクワイズプレートの失敗に三本間に殺さる、後者凡死。 第八回 兩軍無為 第九回 五高凡死。結局一A對零にて再び敗る。

高 地橋田見井川内田井 打數 二二  
三振 一〇  
五 菊石野古筒小山富藤 四死 四  
846315792 安打 二

專 江本川 徳中田室田 打數 二九  
三振 三  
新山田 神安村小瀬 四死 三  
108524793 安打 二

對高商對醫專の試合の成績をみるに可成りの守備力を有しながら零敗を喫せしは要するに打撃の利かざることを証明するものなり。對高商の際第一回日等には無死満塁の好機なるにこれを逸せしは或は打撃力に前後その相違の甚しきにある如く思惟せらる。

A 對九州學院練習試合(五回ゲーム)五月二十四日武夫原に於て行ふ十六對二にて五高勝

！A對七高戰に就て。一度南溟の雲怪く城山  
風狂ふ昨冬十二月二十六日龍南垂千の輿望を  
荷ひて遙々薩南の地に駒を進めしに天我に幸  
せず時我に利あらず白旗肅然地に落ち紅淚滴  
つて止むるところを知らず日を經月を閱する  
こころに六ヶ月、勝利の美酒に酔ふ者は月  
目の歩みも短かからん。されど臥薪嘗膽夢寢  
にも忘れず只管報復の念に赤熟する我等には  
六ヶ月は實に千秋の感なくんばあらず。本年  
度の試合は七月中旬と決せり。選手一同の決  
心素より堅く日に増す猛練習も意こせず凡て  
を犠牲にして鎧袖一觸の快味に酔はんことを  
希ふものなり。ホールの哮リバットの響或は  
我等を鼓舞し或は激勵す。たこへ我等九人の  
血肉は枯果つることも尙頼む龍南垂千の健兒  
の剛毅朴訥不撓不屈の意氣を以て阿蘇靈峰の  
如き底力ある元氣を以て戦はんことを欲するもの  
也。(瓜生)